

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 23 年 5 月 23 日現在

機関番号：32407

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21760505

研究課題名（和文） 明治後半の東京における病院の立地と建築—医療・衛生からみた都市と建築の変容

研究課題名（英文） Location and Building of Hospitals in Tokyo at the Beginning of the 20th Century : The Transition of the City and Architecture from the Aspect of Medical Service and Sanitation

研究代表者

勝木 祐仁（KATSUKI YUJI）

日本工業大学・工学部・准教授

研究者番号：00508989

研究成果の概要（和文）：明治期後半の東京における私立病院の立地と建築的実態の一端を、新史料の発掘により明らかにした。立地については高台などの療養に適した環境と、交通の便を重視する傾向が捉えられた。建築については、明治 40 年代に外観意匠の洋式化と近代的な医療設備の導入が顕著にみられた。病室は、各時期を通じて和式・洋式とも重用され、患者の快適性を重視した療養空間の確保が目指されていたと捉えられる。

研究成果の概要（英文）： This research examines the location and the architectural style of the hospitals in Tokyo at the beginning of the 20th century with using new historical materials. As for location, the tendency to seek the right environment for patients' treatment and the traffic access are observed. In architectural aspect, the exterior appearance was in the transition form Japanese to European. However, not a few hospitals prepared both Japanese and European patients rooms.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
- 年度	-	-	-
- 年度	-	-	-
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：都市・建築史

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：病院、医療、明治、近代、東京

1. 研究開始当初の背景

建築史の分野で病院建築は、学校付属病院・公立病院・陸軍病院が主な対象とされ、私立病院については、実態の解明と史的評価が十分に行われてこなかった。新谷肇による『近代日本の病院建築に関する計画史的研究』（有明工業高等専門学校、1988）は、日

本の病院建築の近代化について基本的な理解を与えた重要な研究であるが、系統的分析を行う上で、私立病院を研究対象から除外している。明治期に建設された個々の私立病院を対象とした研究は散見されるが、全体像や一般的な特質は検討されていない。現存するものが少なく、また、当時の建築的実態を知

るために必要な史料が紛失、廃棄あるいは欠乏しているためと考えられる。

しかし、史料探査を通じ、明治後半には医療に関する諸事を集成した著作（以後、本研究では「医療案内書」と記述する。）が出版されており、その中には、病院の所在地、周辺環境、建築に関する記述が比較的豊富に含まれていることが見出された。観光案内書や地誌、区・郡史などにも、私立病院に関する記述や絵図が散見された。そこで、以上のような史料を悉皆的に収集することで、明治後半の東京における病院の立地と建築的実態の解明について、有意義な成果が得られると期待された。

2. 研究の目的

本研究は、これまで明らかにされてこなかった、明治後半の東京における私立病院の立地と建築的実態を、新史料の発掘を通じて明らかにし、特にモダニズム建築としての病院との比較から史的評価を行うことを目的としたものである。近代日本の都市における医療施設の展開過程を明らかにする研究の一部を構成するものであり、医療・衛生という観点から、都市・建築の近代化に新たな視角を与える意味で有意義と捉えられる。

研究対象とする地理的範囲は、都市における医療環境の形成という観点から、昭和7年以降の大東京に該当する、当時の東京市および近接5郡とした。対象時期は、比較的豊富な史料の発掘と収集の見込まれる明治30年代半ばから明治40年代とした。

3. 研究の方法

(1) まず、研究対象の全体像を把握するために、明治30年代半ばから明治40年代の東京に存在した病院のリストを整備する。

(2) 各年代における病院の所在地を地形図上にプロットし、立地の変遷と各年代における立地特性を明らかにする。

(3) 対象とする病院の建築図面、工事関係書類、写真、絵図など、建築的実態を示す史料があれば可能な限り収集する。医療案内書、地誌、観光案内書、地誌、区史・郡史などの史料からも、立地や建築的実態に関する情報を抽出する。

(4) 以上で得たデータの分析から、個々の病院およびその総体について、立地と建築形式の変遷を明らかにし、その史的評価を行う。

4. 研究成果

(1) 対象時期の東京における私立病院の総体の把握

明治15年に刊行された『東京府統計書』

には、明治期を通じて「衛生」編の「病院」等の項に、病院の一覧が示されている。これらは、東京警視庁が営業を認めた全ての私立病院を示したものと捉えられる。同史料から195件の私立病院を確認し、病院の名称、所在地、診療科目などの情報を抽出した。

その結果、明治10年代には20数件であった私立病院が漸次増加し、明治40年から44年にかけては79件から131件に増加したことがわかった。明治40年代は東京における私立病院の発展期と捉えられる。また、研究対象時期とした明治30年代半ばから明治40年代にかけて147件の病院が存在したことを確認し、それらを研究対象と定めた。以後、本研究で対象とする私立病院を「対象病院」と記す。対象病院の一覧を表1に示す。

(2) 立地およびその変遷

各年代における対象病院の所在地を区郡別に捉えた上で、地形図上にプロットし、立地傾向を捉えた。また地誌や記念誌等に示された、各病院の立地の決定要因について確認した。

①区郡別に捉えた立地

ここでは、研究対象時期より遡り、明治10年代から明治40年代までの各区・郡における対象病院の所在件数を確認した。図1は、病院の発達において郡部より先行した、市内15区における対象病院の所在件数を示したものである。これにより、明治20年までは芝区・本郷区・神田区・浅草区に多くの私立病院が立地していたことがわかる。以後、明治20年代後半には日本橋区、明治30年代には麹町区・京橋区に多くの病院が開院している。以後、市内中心の神田区・京橋区・麹町区・日本橋区に多く立地する傾向がみられる。特に明治30年代以降、神田区への病院の集中が顕著となり、明治40年代後半には、対象病院の約18%が同区に存在するに至った。その他の区でも病院が漸増し、明治30年代後半以降は郡部にお

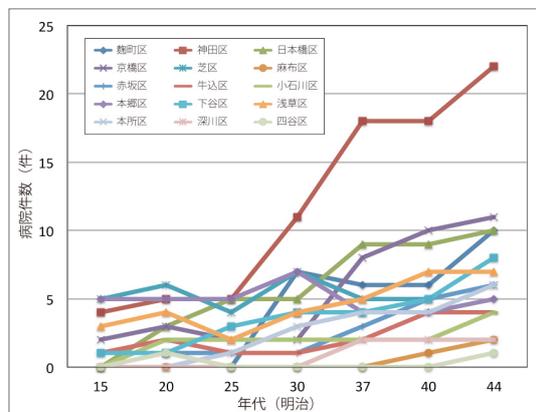


図1 区別にみた明治期東京における病院件数の推移
（『東京府統計書』のデータに基づき作成。）

表 1 明治期後半の東京における私立病院一覧

	病院名	年代(明治)					
		37	38	39	40	44	
麹町区	日本赤十字社病院	○					
	回生病院	○	○	○	○	○	
	愛生病院	○	○	○	○	○	
	胃腸病院	○	○	○	○	○	
	東京眼科病院	○	○	○	○	○	
	婦人科産科婦人科病院	○	○	○	○		
	全生病院		○	○		○	
	婦人共立育児曾育会病院					○	
	聖母堂病院					○	
	九段病院					○	
	朝倉病院					○	
	木澤病院					○	
	東京至誠病院					○	
	小計	13	6	6	6	5	11
神田区	瘡毒痔疾病院	○	○	○	○	○	
	香雲医院	○	○	○	○	○	
	井上病院	○	○	○	○	○	
	山龍堂病院	○	○	○	○	○	
	東洋内科医院	○	○	○	○	○	
	東京産科婦人科病院	○	○	○	○		
	水原産科婦人科病院	○	○	○	○	○	
	東京耳鼻咽喉科医院	○	○	○	○	○	
	神保医院	○	○	○	○	○	
	内科橋田病院	○	○	○	○	○	
	朝倉病院	○	○	○	○	○	
	児玉病院	○	○	○	○	○	
	宇津木病院	○	○	○			
	大西眼科医院	○					
	岡村病院	○	○	○	○	○	
	帝国脳病院	○	○	○			
	神田病院	○	○	○	○	○	
	東京小児科院	○	○	○	○	○	
	山口眼科病院		○	○	○	○	
	和泉橋病院				○	○	
	東駿河霊病院					○	
	産科婦人科濱田病院					○	
	日本病院					○	
	明仁堂病院					○	
	三非慈善病院					○	
	馬島病院					○	
	小計	31	19	18	18	18	22
	日本橋区	告成堂病院	○				
		日本橋病院		○	○	○	○
		櫻井病院	○	○	○	○	○
		吉松病院	○	○	○	○	○
中洲養生院		○	○	○	○	○	
天祐堂病院		○	○	○	○	○	
産科婦人科濱町病院・楠田病院		○					
両国病院		○	○				
橋爪病院		○	○	○	○	○	
木下病院		○					
矢ノ倉病院		○				○	
佐藤病院						○	
菊池耳鼻咽喉科医院						○	
北村胃腸病院						○	
小計		16	10	3	10	11	12
京橋区		加藤病院	○	○	○	○	○
		外科林病院	○	○	○	○	○
	内科山田病院	○	○	○	○	○	
	田村病院	○	○	○	○	○	
	木村病院	○	○	○	○	○	
	築地聖路加病院	○	○	○	○	○	
	鈴木胃腸病院	○	○	○	○	○	
	海岸病院	○	○	○	○	○	
	池田病院		○	○	○	○	
	岡田内科病院				○	○	
	天真園岡田病院					○	
	大野病院					○	
	霊岸島病院					○	
	小計	17	8	9	10	10	13
芝区	東京慈恵病院	○	○	○	○	○	
	東京病院	○	○	○	○	○	
	高輪病院	○	○	○	○	○	
	尊生院 松山病院に改称		○				
	養生園	○	○	○	○	○	
	瘡病室						
	松山病院				○	○	
	東京肛門病院					○	
小計	13	4	5		5	6	
赤坂区	赤坂病院	○	○	○	○	○	
	東京青山病院	○	○	○	○	○	
	共愛医院			○	○		
	帝国脳病院			○	○	○	
	千代田病院					○	

	病院名	年代(明治)				
		37	38	39	40	44
赤坂区 (つづき)	岡崎病院					○
	松浦病院					○
	順天堂医院分院					○
小計	7	2	4	4	3	7
牛込区	東京戸山病院	○	○	○		
	東京神経系病院	○	○	○		
	戸山○病院					○
	道生病院			○	○	○
	同仁病院				○	
	早稲田病院					○
	東京至誠堂病院					○
小計	8	2	3	4	0	4
小石川	明々堂眼科医院	○	○	○	○	○
	狩野病院	○	○	○	○	○
	小石川病院					○
	音羽養生所					○
小計	7	2	2	2	2	4
	本郷区	順天堂病院	○	○	○	○
	眞泉病院	○	○	○	○	○
	木下病院				○	○
小計	13	2	3	3	2	3
下谷区	根岸病院	○	○	○	○	○
	東京田代病院	○	○	○	○	○
	丸茂病	○	○	○	○	○
	桐淵眼科病院	○	○	○	○	○
	笹川病院					○
	高松病院					○
	濱野病院					○
	耳鼻咽喉科専門根岸養生院					○
	脳脊髄病院					○
	救世車病院					○
	日野病院					○
小計	14	6	4	5	3	14
浅草区	浅草病院	○	○	○	○	○
	樂山堂病院	○	○	○	○	○
	明治病院	○	○	○	○	○
	精研堂病院	○	○	○	○	○
	岩田病院	○	○	○	○	○
	千代田病院	○	○	○		
	雙鹽病院					○
	内田小児病院					○
東京呼吸器病院					○	
小計	13	6	4	6	5	8
本所区	東京市本所病院(市)					
	近藤病院	○	○	○	○	○
	江東病院	○	○	○	○	○
	殿橋病院	○	○	○	○	○
	花園病院					○
	佐々木病院					○
小計	6	3	3	3	3	5
深川区	上田病院	○	○	○	○	○
	深川養生院	○	○			
小計	2	2	2		2	2
四谷区	四谷病院					
小計	2	0			0	1
麻布区	北村胃腸病院					○
	龍門病院					○
小計	2	0			1	2
荏原郡	慰療園	○	○	○	○	○
	羽田愛生院			○		
	鑛泉病院					○
	品海病院					○
	山下病院					○
小計	4	1			2	4
豊多摩郡	赤坂病院分院衛生園	○	○	○		
	日原淋巴病院	○	○	○	○	○
	多納病院	○	○	○		○
	井村病院					○
	大久保脳病院					○
	日本赤十字社病院				○	○
小計	6				1	4
北豊島郡	東京脳病院	○	○	○	○	○
	板橋共立病院	○	○	○		
	王子病院	○	○	○	○	○
	東京精神病院	○	○	○		
	王子精神病院	○	○	○	○	○
	東京呼吸器病院					○
	保養院					○
木村病院					○	
小計	11	5	5		3	6
南葛飾郡	小松川病院	○	○	○		
	加命堂病院					○
小計	3	1	1		1	1

ける発達もみられ、東京の広い範囲に病院が普及しつつあったと言える。

②地形図上で捉えた立地

『東京府統計書』により対象病院の町名・番地を確認し、所在地を地形図上にプロットした。図2は明治15年および25年における立地状況を、図3は明治37年および44年における立地状況を示したものである。

15年頃から明治30年頃までは、標高が相対的に高い台地、もしくは日本橋川、隅田川等の川沿いに立地する傾向があったと捉えられる。その状況は、前項でみた神田区・日本橋区付近への病院の集中と対応する。30年代前半には、本郷区・麹町区などの高台において、複数の病院の新設が見られる。

明治30年代後半には、すでに病院の発達していた神田区・京橋区・麹町区・日本橋区において、さらなる病院の新設が見られるとともに、その周辺の地域へと立地の広がりが見られる。上記の各区における病院の新設は、高台ばかりではなく、路面電車の走る繁華な市街地などにも見られる。

③各病院の立地要因

明治初期に開院した順天堂病院・杏雲堂病院は、個別の事情により自宅の位置が定められ、その隣地に病院が開設された。閉院した病院の建物・設備を利用した病院や、廃業した遊郭の建物を利用した病院もみられた。既存の建築物の利用は、初期投資を抑える意味で有効であったと考えられる。

一方、明治30年代・40年代に発行された地誌や医療案内書を見ると、各病院の立地を「高燥」、「閑静」、「空気清浄」などの表現により、療養に適した環境であるとした記述が複数みられる。また、医療案内書には、地方在住者が東京で受診・入院する方法や心得を記したものがある。当時の東京の病院は、医療技術および知識の集積により、立地する地域の住民以外も広く受け入れたと捉えられる。病院新設時、立地の決定において、市外や地方在住者の来訪への利便性が考慮された可能性がうかがわれる。

④まとめ

年代が降り、都市が拡大するにつれて、私立病院は市内外の広い範囲に立地するようになっていくと同時に、神田区・京橋区・麹町区・日本橋区など、比較的早い時期から病院の発達した地域に、さらなる病院の集中が進んだ。それらの各区において、高台に多くの病院が立地したのは、療養に適した衛生的な環境を重視したためと捉えられる。一方、明治30年代後半以降は、繁華な市街地において病院の集中が進んだ。比較的高度な医療技術および知識を持った東京の病院は、地理的に広い範囲からの患者の来院に対応したため、交通の便のよいことが重視されたと推察される。

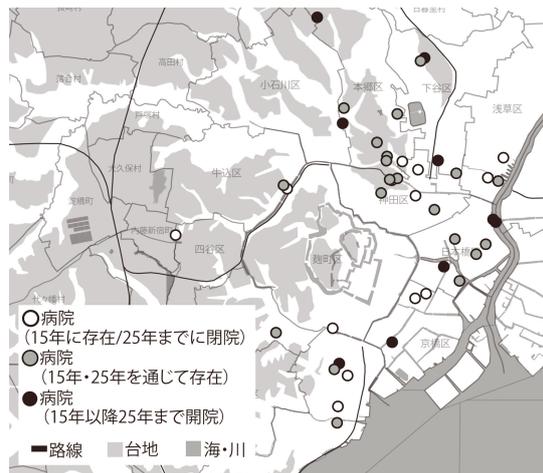


図2 明治15年および25年における私立病院の所在地

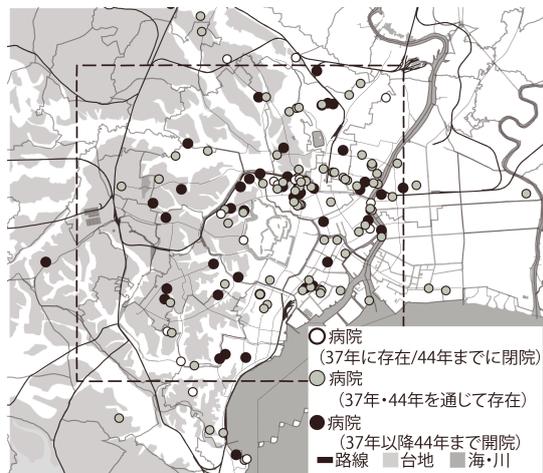


図3 明治37年および44年における私立病院の所在地

注：破線で囲まれた領域は、図2の範囲を示す。

(3) 建築の実態とその変遷

医療案内書や地誌等から、対象病院の建築の実態に関する記述や写真を抽出し、外観意匠、病室の形式、その他の設備について検討を行った。明治30年代半ばについては、『日本東京医事通覧』（工藤鉄男編、日本医事通覧発行所、1901）を、明治40年代半ばについては、『東京医療案内』（暁声社編、暁声社、1910）を主な資料としている。

①外観意匠

史料に記された様式名称および外観写真から、対象病院の外観意匠について検討を行った。様式の名称に厳密な定義は見出せず、おおまかに「和式」「洋式」「和洋折衷」の3群に分類して捉えた。それぞれの一例を図4～6に示す。明治30年代半ばの対象病院で外観意匠の判明した病院は、全体の38%に過ぎないが、そのうち「和式」が約39%、「洋式」が約26%、「和洋折衷」が約35%であった。西洋式の医療を実践した病院の建築に「和式」の外観意匠が採用されることは珍しくなかったと捉えられる。明治40年代半ばの対

象病院については、約 82%について外観意匠が判明した。「和式」が約 19%、「洋式」が約 74%、「和洋折衷」が約 7%となっている。特に 30 年代半ば以降に設立された病院のみでは、21 件中 17 件（約 81%）が「洋式」である。30 年代後半から 40 年代前半にかけて外観意匠を「洋式」とすることが一般化したと言える。日本橋病院のように、明治 40 年代の改築に際し、外観が「和式」から「洋式」に変化したものも複数みられる（図 7）。

②病室の形式

明治 30 年代半ばと 40 年代半ばの両時期について病室数の判る 13 件の病院のうち、8 件で病室数が増加している。病院新設が相次ぐとともに、既存病院で病室の増設が進んでおり、病院の拡張期であったと言える。病室の形式の判明した 9 件のうち 8 件で和室が、5 件で洋室が採用されている。病室として、和室・洋室がともに広く採用されていたと考えられる。和室を特等病室とする病院がある一方（図 8）、洋室を和室より等級の高い病室とする病院もみられた。

③その他の設備

「研究室」は、30 年代半ばの病院のうち 3 件、40 年代半ばの病院のうち 16 件で確認された。『東京医療案内』に室構成が記載された 23 件に限ってみると、そのうちの 12 件（約 52%）において「研究室」の存在が確認された。当時の東京における私立病院の多くが、研究の機能を有していたと言える。同書は一般の人々を対象とした出版物であり、「研究室」の存在を示すことは、科学的医療の研鑽に努めていることを訴え、患者に信頼感を与える意味があった可能性が窺える。

「手術室」は、明治 30 年代半ばでは 6 件で確認でき、明治 40 年代半ばでは 13 件で確認できた。医療設備につき記載のある病院 18 件のうち 6 件にレントゲンが、3 件に蒸気消毒の設備が存在した。

「娯楽室」は、胃腸病院（図 9）、東京療病院、帝国脳病院の 3 つの病院で確認できた。帝国脳病院には「玉突場」も設けられていた。これらの娯楽的な設備の存在は、明治期東京の私立病院にみられる特徴の一つと言える。

（4）まとめ

明治 30 年代後半から 40 年代の東京の私立病院について、全体像と立地傾向を統計資料から、建築的な実態の一端を医療案内書を主な史料として明らかにした。

遊郭などの既存建築物を改修して開業した病院があること、また建築図面の残る病院の平面形式から、医療行為や医療設備に対応した病院固有の建築形式は確立していなかったと捉えられる。病院の新設と既存病院の改築に伴い、レントゲン室や手術室のような



図 4 明治 30 年代における日本橋病院（『日本東京医事通覧』より）

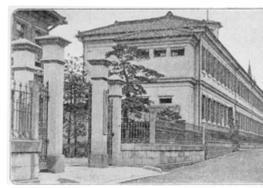


図 5 杏雲堂病院（『東京医療案内』より）



図 6 樂山堂病院（『日本東京医事通覧』より）



図 7 明治 40 年代における日本橋病院（『東京医療案内』より）



図 8 東京病院の「特等病室」（『東京医療案内』より）



図 9 胃腸病院の「娯楽室」（『明治東京医事通覧』より）

建築と一体化した医療設備の普及や、病室規模の拡大により、病院固有の建築形式が形成されつつあったと考えられる。病室については、等級に応じた格式の設えや、患者の好みに対応した和室・洋室の備えのある病院も複数あった。看護・看護の効率性より、居住性が重視されていたと言える。患者の慰安のために娯楽的な設備を設けた病院も複数みられた。

明治後半の東京における私立病院の建築は、近代医療への対応という観点からは、その起点に立ったに過ぎないとも言えるが、その基礎を築いたものとも位置づけられる。また、患者への快適な療養環境の提供という点では、モダニズムの影響を受けた病院建築との対比において、積極的に評価できる面もあったと言えよう。

5. 主な発表論文等 現在のところなし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝木 祐仁 (KATSUKI YUJI)
日本工業大学・工学部・准教授
研究者番号：00508989